

人文・ 社会系

中国浙江省新石器時代遺跡の植物考古学的研究から漆と茶の利用の起源を解明

金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系 教授 **中村慎一**



研究の背景

中国長江の下流域、中でも浙江省は有名な河姆渡遺跡^{カボト}に代表される低湿地遺跡の宝庫です。私たちは日中共同の研究チームを組織し、考古学と植物学・農学・古環境学などが手を携えて、東アジアにおける各種植物利用の歴史、特に起源問題の解明に取り組みました。

研究の成果

まず漆についてですが、これまでは河姆渡遺跡出土の漆碗が中国最古の漆器とされてきました。しかし、その鑑定は科学的分析結果を踏まえたものではありません。そこで私たちは河姆渡遺跡^{カボト}と同時代の田螺山遺跡^{デンラサン}の前期層(約7000年前)から出土した「円筒器」塗膜片の赤外分光分析と透過顕微鏡観察を行い、少なくとも3回ウルシが塗られていることを確認しました。さらに、それより1000年ほど古い跨湖橋遺跡^{コキョウ}から出土した木弓(図1)の表面にもウルシが塗装されていることを確かめました。科学的分析を経たものとしては間違いなく世界最古の漆器となります。

田螺山遺跡の中期層で検出された「茶畑」も特筆すべき研究成果です。十数本ずつまとまって並ぶ根株が2ヵ所で検出されました(図2)。木材構造の顕微鏡観察からはツバキ属の同一種の材であることまでしか分かりませんが、現在の栽培茶のそれと良く一致すること、また、出土状況からみて人為的に植栽されたと判断されることから、茶(チャノキ)であると推定しました。うち1点について加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行ったところ、その暦年代は87.7%の確率で3526BC-3366BCに収まることになりました。5400年前頃までには長江下流域で茶の栽培が始まっていたらしいことが明らかになったのです。現在、DNA分析からチャノキであることが確定できないかと分析を進めています。

今後の展望

私たちの研究テーマは、ここに紹介した以外にも、花粉や珪藻を用いた古環境復元、動物骨や植物種実の同定(図3)、人骨のアイソトープ食性解析など多岐にわたります。それらの成果を総合し、アジアの初期稲作文化の実態解明をさらに進めていきたいと考えています。



図1 跨湖橋遺跡出土の漆弓



図2 田螺山遺跡における「茶樹」の出土状況



図3 田螺山遺跡出土の炭化米

関連する 科研費

平成15-17年度 基盤研究(B)「長江下流域新石器文化の植物考古学的研究」
平成18-19年度 特別研究員奨励費「中国新石器文化の植物考古学的研究—研究手法の開発と実践—」
平成18-21年度 基盤研究(A)「河姆渡文化研究の再構築—余姚田螺山遺跡の学際的総合調査—」